

# Summer Workshop on Economic Theory (SWET) : 経緯と展望

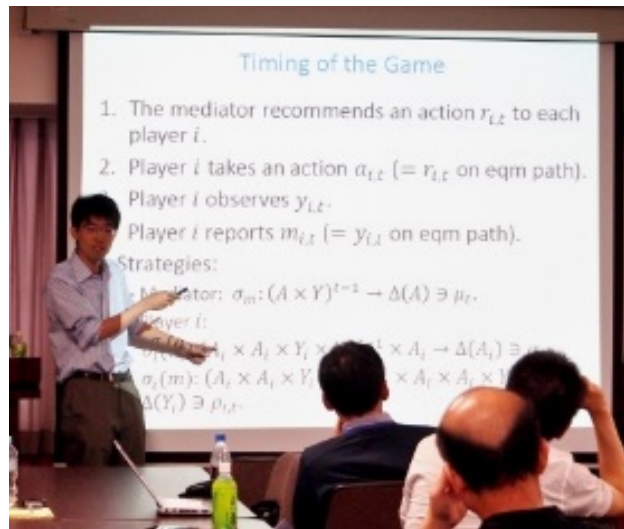
2014年8月21日 梶井厚志

## SWET2014の概要

Summer Workshop on Economic Theory (略称 SWET)は、2006年から毎年8月に北海道で開催され、2014年の今年で9回目を迎えた。筆者はその第1回から企画と全体のとりまとめ役をしてきたので、この機会に SWET の内容とその目指すところを紹介したい。

SWET では、共通のテーマに基づく研究報告を集めたセッション単位で研究会がおこなわれている。今年の SWET2014では7つのセッションを、8月5日から12日までの8日間でおこなった。題名に **Economic Theory** とあるように、主要なテーマは経済理論ではあるが、報告・検討される論文は必ずしも理論系のものに限られない。今年のセッションのタイトルを見ると、「マイクロ経済学・ゲーム理論」、「サーチ理論」、「計量経済学」など、いかにも理論らしい題目だけではなく、「国際経済学」、「マクロ金融」、「流動性のマクロ経済学」、「バブルと金融危機」という、より応用・実証に重点をおいたものも並んでいる。

紙幅の制約上、すべてのセッションについて詳細を述べることはできないので、ここでは2日間にわたっておこなわれた、筆者に特にかかわりの深い、「マイクロ経済学・ゲーム理論」のセッションについて簡単に記しておこう。このセッションはこれまで毎年企画されていて、マイクロ経済学やゲーム理論に関する、主として数理的・純粋理論的な論文が報告される。京都大学の関口格氏と一橋大学の国本隆氏が担当した今年は特に盛況で、このセッションへの参加者は50名を超えた。特に印象に残ったのは、「繰り返しゲーム」の理論を世界でけん引する日本人研究者が国内外から6名揃ったことだ。報告されたこの分野の先端にある2論文はもとより、分野に必ずしも詳しくない筆者のような者にも刺激的な議論が展開された。また、ゲームの解法と計算量との関係について、計算機科学の観点からのチュートリアルもおこなわれた。ともすれば計算できるか否かという質的な興味に偏りがちな経済学者たちにとって、計算についての量的な視点は大変新鮮なものだった。



スタンフォード大学の菅谷拓生氏による報告(「ミクロ経済学・ゲーム理論」のセッション)

## SWET の特色

多様なセッションが、1週間を超える長い期間にわたって続くことから想像されるように、SWET は通常の学会や研究集会とは趣が違う。日本経済学会の定例大会のように、多様な会員のニーズに応えるべく、多くの平行セッションをおこなうものではない。他方で、特定の研究領域の専門研究者のための集会でもない。SWET という学会組織が存在するわけではなく、会員という概念さえ存在しないオープン参加の研究集会なのである。集会参加の事前登録も不要で、ふらりと当日現れて出席簿に署名すれば、誰でも歓迎される。プログラムは SWET のホームページにて公開されている(<http://www.int.otaru-uc.ac.jp/swet>)。

SWET がこのような独特の形態を持つに至った理由は二つある。第一は後述する運営上の要請である。第二は、毎年スタンフォード大学の Stanford Institute for Theoretical Economics (SITE) で開催される、夏休みの研究集会 SITE Summer Workshop を手本にしたことである。SITE 集会の目的は、論文報告集めにとどまらず、研究者が自由に交流できるゆったりとした環境の提供にもおよぶ。ここでは、そのような研究環境が新鮮かつ創造的なアイデアを育成するために果たす役割の重要性が理解され、実践されているのである。今年のスケジュールを見ると、こちらのほうは3日間程度の報告会で構成されるセッションが9個あって、それらが6月19日から8月27日までの間に実施されている。現在の SWET は質量ともに比較の対象にもならないが、理想とするところは同じだと私たちは信じている。

つまり、SWET は単なる研究報告会ではなく、もっと深いレベルでの研究者の交流場所であることを目標としているのだ。研究報告を中心に、先端の学術的問題を討論する場であることはもちろん重要ではあるが、普段あまり顔を合わせない研究者たちに、様々な形で情報交換をできる場を提供することが、SWET の重要なミッションであると私たちは考えている。そのため、研究報告会場だけではなく、参加者が自由に使える「勉強部屋」を確保して、自習はもちろん研究の打ち合わせや討論にも使えるように配慮している。



会場では質問やコメントが活発に飛び交う

## 研究会の歴史

SWETの契機になったのは、京都大学経済研究所で現在も毎週木曜日におこなわれている、「ミクロ経済学・ゲーム理論研究会」が企画した「合同研究会」である。2005年に九州大学と熊本学園大学にておこなわれたこの企画は、少なくとも京都から半ば物見遊山に出かけて行ったメンバーには大好評であった。それで翌2006年の8月には、猛暑日の続く京都を逃れるべく、北海道大学と小樽商科大学との合同研究会を開催したのである。

この合同研究会は、参加する京都大学経済研究所、北海道大学と小樽商科大学がそれぞれ報告者を出し合い、北大で1セッション、商大で1セッションを開催するという小規模なものであったが、夏の北海道という恵まれた環境でおこなわれたこの合同研究会を経験した筆者は、ここで忽然とサトリを開いてしまった。以前より、SITEの夏休み集会のようなものが、どうして日本にはないのだろうと不満に思っていたのだが、誰かが企画しないかと待つのではなく自分で実践すべしと啓示を受けたのである。それで、この合同研究会を地元で支えてくれた北海道大学の工藤教孝氏と小樽商科大学の横田宏治氏に、この研究会を拡大発展させ、毎年定期的に北海道でSITEの真似事のようなものやってみようではないかと提案した。お二人から快諾を得て、その後続くであろう合同研究会シリーズにつけた名称が、SWETなのである。

そのため2007年の合同研究会はSWET2007と改称し、6セッションを6日間でおこなった。セッションのテーマも一気に広がり、このときは「マクロ・成長論」、「金融」、「応用マクロ」、「応用ミクロ」、「ミクロ」、「ゲーム理論」となっている。以降、毎年6～8セッションを企画し、着実に成長してきた。総参加者数でいえば、当初は50名程度であったが、100名を超える規模になった。参加者の所属先も、3大学の枠をはるかに超え、昨年までのべ45校になっている。本稿の執筆時点ではまだ集計を終えていないが、今年は100名をはるかに超える参加者があったようだ。北海道大学と小樽商科大学(小樽本校および札幌サテライト)がSWETの「常設」会場であるが、SWET2011

では1セッションをはこだて未来大学、SWET2012・2013ではのべ4セッションを釧路公立大学で開催した。

## 運営方法の特徴

各セッションは小規模ではあるが、いくつものセッションを長い期間連続開催するのは、そう簡単な仕事ではない。特に、毎日20～50名もの参加者が出入りする会場を、何日にもわたって取り仕切るために必要な気力と労力は並大抵ではないのだ。それを曲がりなりにも9年間つづけられたのは、運営方法の工夫に負うところが大きく、それがSWETの特色ともなっている。

すでに述べたように、SWETは学会組織ではなく、この研究集会は会員のためのサービスではない。学会組織となれば、資金調達や労働力確保には役立つかもしれないが、組織運営上の様々なコストが発生することが不可避で、少なくとも筆者にはとても耐えられない。そこで、基本的に各セッションは独立してそのセッションの運営をすべしと定めた。報告者集めや、旅費の調達も各セッションの担当者の仕事であり、その内容をSWETは基本的に関知しない。SWETが用意するのは集会用の部屋と勉強部屋、そしてWEBを通した広報である。かつては資料のコピーと配布もしていたが、SWET2013からはペーパーレス化をはかり、報告のための資料は、報告者各自がSWETサイト上の指定された場所に掲示することにした。これにより主催者側の労力はさらに減って、今後の継続可能性もかなり上昇したと思う。実は、企画とりまとめ役の筆者の仕事量が関係者の中では一番少なくて、セッション担当者の選定と依頼、そして期日までにセッションが構成されるかどうかモニターするだけである。これだけ省力化されれば、少なくとも労力という点では数週間にわたる開催も可能であり、理想とするSITEの世界に徐々に近づいている。

それにしても、会場の確保をはじめ、これまで現地の段取りを主導してくれた人たちの貢献、特に前述の工藤・横田両氏の努力なくして、SWETは存在しえなかったことを、ここに強調しておきたい。



初日終了時の集合写真(このあと、ジンギスカンを堪能)

## 今後の課題・目標・願望

年々着実に発展を続けるSWETは、来年でいよいよ10回目を迎える。節目のこの年に、より長期

間をかけて盛大におこないたいのではあるが、残念ながら開催期間をこれ以上延ばせない事情がある。まず、来年はエコノメトリック・ソサエティの世界大会(5年に一度)の開催年にあたっていて、モンリオールで8月後半に開かれるために、8月半ばまで日程を伸ばすことができない。また、数年前から始まった「改革」の影響で、大学の授業が破廉恥にも8月上旬までおこなわれるようになっており、開始時期を早めることは困難である。今年の日程でさえ、期末試験の時期に重なるという参加者も何人かいたし、そもそも会場である小樽商大の試験期間に重なっていたのである。結局、長い夏休みのはずなのに、実は時間を自由に取れず、SWETの期間拡張は夢のまた夢というしかない。

SWETにとってより現実的な目標は、自前で資金を確保して、前途ある大学院生をSWETに多数招待することだ。SWETでは、専門が必ずしも自分のものと同じでないセッションが連なっている。もちろん、高度に専門的な研究報告は、専門外の間が1日聞いたところで理解できるものではないが、ほかの分野でどのようなことが流行しているのかを学ぶには絶好の機会だ。また、この環境では専門研究者たちとの距離がずいぶん近くなり、様々な形での交流が可能である。これから自分の専門分野を定めようとしている大学院生たちにとって、SWETは最適な環境だと私は信じて疑わない。しかしながら、組織だって大学院生を集めるだけの資金的裏付けはなく、参加する先生たちの個人の研究費でなされる学生の引率に頼っているのが現状である。毎年20名の大学院生を招待できれば、我が国の経済学研究者育成のために大きく貢献できるはずだが、非力にして目途はたたない。どうやら一度のサトリでは不十分らしい。